

日本人が主宰するチェコ俳句会

—南チェコのヴォドニャニにて—

国際学部 松井貴子

はじめに

南チェコのヴォドニャニという町に、日本人が主宰し、チェコ人が参加している俳句会がある¹。主宰の尾形祐美氏が、パヴェル・ヤンシュタ氏とともに、月見草句会を創立したのは、ヤンシュタ氏が、プラハで開かれた俳句会に参加したことがきっかけであったという。絵とことばの作家として活躍している尾形氏は、自身の絵から俳句を作るワークショップや、季語を題として句を作る句会を試み、それから、定期的に句会を開く月見草句会を始めた。句会で高評価を得た句と、吟行や句会の様子を撮影した写真を掲載した句会報を、句会ごとに発行している。

I チェコ月見草句会

尾形氏が、自ら句会を始める原点となったのは、2017年に、ハワイの日系人で、マウイホトギス会を主宰する林古ジェファース氏が、チェコを訪問し、プラハの日本大使館で句会を開いたとき、ヤンシュタ氏が参加したことであった。

ヤンシュタ氏は、大学で政治と哲学を専攻し、人々（町民）のコミュニティ形成に関心を持っていた。俳句が、句の作者と、それを鑑賞する読者の「存在の奥に眠る感覚」を引き出すことに感動し、俳句に奥深さを感じたこと、句会が、誰でも参加しやすいことから、市民や学校向けの俳句のワークショップを始めたという。

尾形氏は、ヤンシュタ氏の影響を受けて、俳句に関心を持ち始めた。月に一度、マウイホト

トギスにメールで俳句を送り、林古氏に句の添削を受けている。チェコに在住しながら、芭蕉、蕪村、一茶から正岡子規、そして高浜虚子の俳句概論などの本を買い集め、日々、学んでいるという。氏は、絵とことばの作家として、版画や絵に、ことばを添えて展示をする活動の一環として、その展示開催中に、最初の俳句ワークショップを行った²。

そこから、俳句についての体験や知識を深めるために、月に一度の自分たちの句会、月見草を始めたということである。尾形氏とヤンシュタ氏は、自分たちの俳句活動を、「俳句道」と称し、「とても感覚的に始め、感覚的に進んでいる」と述べている。

月見草句会では、次のような手順で、句会が進行されている³。

- 1 紙片にそれぞれの句を書いてもらい、袋にまとめて入れる。その場に来れない人はメールで送り、ヤンシュタ氏が代筆する。
- 2 袋を回し、一人ずつ紙片を引いて、半分にしたA4紙に書いていく。
- 3 紙を回して、それぞれの特選句A一句、B二句を選ぶ。Aには2点、Bには1点を付ける。
- 4 一番点数の多い句から、票を入れた人、作者の順に意見を発表する。
- 5 点数の多い句3～4句を、1～2週間以内に、尾形氏が日本語に翻訳し、選句結果と合わせてメールで送る。

2 ホームページにその様子が載っている。<http://www.hiromi.cz/exhibitions/92-nanimoon>

3 コロナ禍で外出や集会が制限されている間は、吟行も、いつものカフェでの句会も、不可能になったため、オンラインで代替した。参加する会員は、投句と選句をメールで送り、主宰が選句結果をまとめて、メールで返送した。

1 パラツキー大学の渡辺隆行先生から、ご紹介頂いた。

6 1年分の句会で出された俳句を冊子にまとめる。(これまでは、日本語とチェコ語のバイリンガルで、今後は英語も含める予定であるという。)

II 春から夏の句

2020年4月から7月の月見草句会報に掲載された句会での高点句は次のようなものであった。原句はチェコ語で、主宰の尾形氏が日本語の句に訳している。



図1 句会報202103 表紙

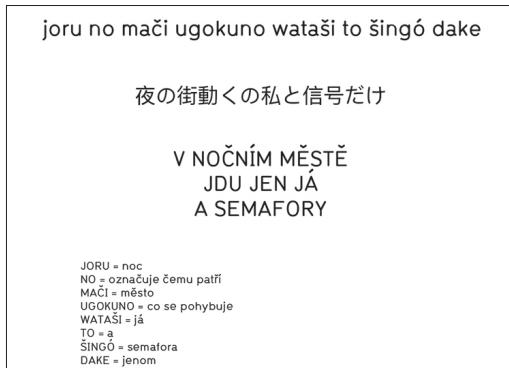


図2 句会報202103 句

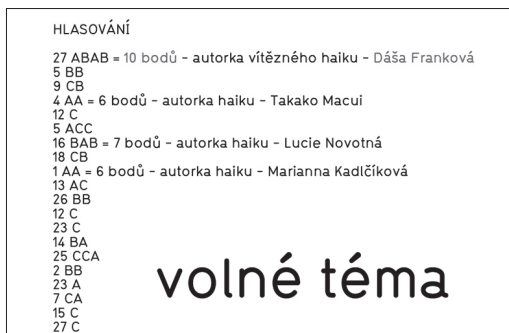


図3 句会報202103 評点・作者

1 4月／春の夢 JARNÍ SEN
SEDÍM V TRÁVĚ
JSEM TICHOU SOUČÁSTÍ
JARNÍHO SNU

草の上とけ込むわたしも春の夢

チェコの冬は雪が積もっている。その雪が解けるとともに、一気に春が来る。雪の下で春を待っていた草が芽吹いて、その上に寝そべって、頬を寄せて、草の匂いを嗅ぐうちに、春草と一体化していく気持ちになり、春の日差しの暖かさに、春らしい眠気を誘われて、夢見心地になっている様子が見える。春になった喜びが、とても強く感じられて、読者の共感を呼んでいる。

PRÁZDNOU KOLONÁDOU
LETÍ VÍTRA JEHO
IGELITOVÝ SÁČEK

コロネード風飛ぶ彼のビニール袋

コロネードは、列柱のある回廊で、ヨーロッパらしい建築である。チェコでも、日本の春一番のような強風が吹くのであろうか？柱の間に起こる風が、複雑な動きをして、重さのないビニール袋を運んでいく。動きのある句である。人も動植物も活動を抑制される冬から解放される春には、「春動く」という季語がある。無生物までも、動きを起こしている春らしい景色の一つである。

2 5月／レタス SALÁT
ZKŘEHNUL PO RÁNU
LEDOVÝ SALÁT
ZMRZLÝCH MUŽŮ

朝霜に凍てついたレタス氷の男たち

日本には、「夏も近づく八十八夜」という言葉があり、別れ霜である。立春から88日で、霜が降りなくなる。日本でも、地域によっては、まだ霜が降りることがあり、チェコでも同様なのであろう。霜が降りた朝、レタスを収穫しようとして、自分も、レタスのように凍ってしまうような体感であったのであろう。季節意識として、冬が終わり、春になって、夏も近づいているとまで思っていると、霜の冷たさは、実際以上に強く感じられてしまうのである。

POD STROMY ROSTOU
V TICHÉM ZRCADLENÍ
VODNÍ KOSATCE

木の下の水の鏡にアヤメかな

自然物が持つ豊かな色彩を現前とさせる句である。木の幹の色、枝に茂る青葉、日の光を反射する水面、アヤメの花の色、日射しが強くなる季節なればこそその絵画的風景である。

古典的な雰囲気には訳された写生句になっている。

NA ROZPÁLENÝCH SCHODECH
K HŘBITOVU
VYPUKLA VÁLKA PLOŠTIC

焼けるよな墓地への階段オオキンカメモシの戦い

石の階段に直射日光が当たっていると、恐ろしく温度が上がる。階段を上る人は、靴裏に熱を感じる。地を這う虫は、小さな足先だけでなく、腹部全面に熱を受ける。階段を上り切るのが先か、身体が灼けてしまうのが先か、時間との闘いである。

ČERVENĚ ZÁŘÍ
V ZELENÍ U KOLEJÍ
PRVNÍ VLČÍ MÁK

赤く光る線路沿いの緑に最初の芥子

赤と緑という対比的な色を一句のなかに詠み込んで、視覚的な印象を強めている。日本の近代俳句は西洋美術の影響を受けて、印象明瞭に詠む写生の手法を取り入れた。この句も、視覚に訴える写生句である。

3 6月／蜥蜴 JEŠTĚRKA
NEDĚLNÍ MŠE
DROBNĚ MŽÍ
DO KVĚTŮ PŘED KOSTELEM

日曜のミサ小雨降る花の上

この句は、尾形氏が、南ボヘミア刺繍と俳句のコラボレーションとして、南ボヘミアン俳画を企図したときに選ばれた句の一つである。夾雑物なく、作品世界がまとまっている。

JEŠTĚRKA V DLANI
MALIČKÉ SRDCE TEPE
POD JEMNOU KŮŽÍ

掌の蜥蜴心臓脈打って

当月の兼題をストレートに詠んだ句である。蜥蜴を掌に乗せることは、誰にとってももの日常的行為ではないであろう。その上に、蜥蜴の様子を細やかに観察して、この非日常的な時間を句の中に継続させている。

MŮJ STÍN
PLAŠÍ RYBKY

POD MOSTEM

僕の影魚を散らす橋の下

野生の魚は用心深い。人影が動くのを、一匹でも感知すれば、全部逃げる。飼育されている魚でも、餌付けされた状況以外では、寄り付くことはない。魚を見ようとして逃げられるのは、多くの人と共有できる経験である。

4 7月／夏の川 LETNÍ ŘEKA

KAPKY DEŠTĚ

ZTRÁCÍ ŽIVOTY

V LETNÍ ŘECE

雨粒の命尽きるは夏の川

この句も、南ボヘミアン俳画に採用されている。チェコ人らしい哲学的な句である。尾形氏は、日本の感覚では、雨粒と川の間で断絶はなく、水が循環すると考えて、そのイメージも図案化して俳画に加えている。

TEN ZVUK

VYTRHÁVAT STOPKY TŘEŠNÍ

TA ROZKOŠ LÉTA

さくらんぼ柄をとる音や夏愛し

日本では、句ではない野菜や果物も多く見かけるが、句の時期にだけ味わえる露地栽培の果物も、まだ多くある。チェコでも同様であろうか？一年ぶりに聞く音は、夏を感じる限られた期間の楽しみである。

ČEŘÍM HLADINU

TEMNÉ LETNÍ ŘEKY

TIŠE

波立てる暗い夏川静けさや

兼題の夏の川は、句の作者により、読者により、様々に変化する季語である。暗さは、視覚を弱め、代わりに聴覚が優勢になる。川の波音があることで、それ以外の場所が無音であることが際立っている。芭蕉の「閑さや岩にしみ入る蟬の声」を思わせる句である。

Ⅲ 句会写真からの創作—時空の共有

ヤンシュタ氏が参加し、月見草句会誕生のきっかけになった俳句会は、写真を見て俳句を作るワークショップであったという。月見草句会の句会報には、毎月、たくさんの写真が載せられている。それらの写真に刺激を受けて、次のような句を創作することを試みた。

1 5月の句会

ブルーベリーどちらのピースに載せようか



図4 5月句会 ブルーベリー

チョコレートでコーティングされた大きな

ホールケーキを16等分している。ケーキの上に、縁取るように飾られた生のブルーベリーは、16等分できない数である。ブルーベリーが1つのピースと2つのピース、悩ましいことである。

構えとは人に向くもの聖五月



図5 5月句会 構え

5月は、聖母マリアの誕生月「聖五月」である。句会を開く、いつものカフェで、仲間の方に向けて取った一瞬のポーズが、武道の構えのように決まっている。

ガラス瓶とレース透けゆく風光る



図6 5月句会 ガラス瓶とレース

夏が近づくと、日射しが強くなる。特に5月は、春から夏へと変化が大きく感じられる。明るく強い日の光が、風に乗って室内に届き、ガ

ラスやレースを透過する。

2 6月の句会

句を作るうつむく角度バラ一輪



図7 6月句会 バラ・ケーキ・額団扇

句を考えている会員たちは、それぞれの角度で俯いている。テーブルに飾られた一輪のバラも、少しだけ俯いているように見える。私が以前に詠んだ拙句「それぞれの鉛筆の角度大試験」と同じ発想の句であると思われた。

ひとかけのケーキ残して夏句会

カフェの句会では、お茶とケーキが用意されている。写真を見ていて、倒れそうで倒れない絶妙な薄さで皿に残っているケーキに目が留まった。そして、それほどに作句に集中しているのだろうと想像した。

白壁の日影にひっそり額団扇

外からの光に対して、少し影になっている白壁に、額に入れられた団扇が飾られている。団扇は中国から伝えられて、日本に定着した。チェコのカフェに、小さな日本が存在していると感じられた。

句を作る輪になっている夏灯



図8 6月句会 夏灯

石造りのカフェの高い天井から吊り下げられた電灯が「夏灯」という季語になっている。夏灯は、どのように句に詠まれるかで、表情を変える季語である。句会が進行して、日が少し傾いてきて、電灯の存在感が増して、句を語り合う輪を、温かく照らしている。

3 7月の句会

夏冷ゆる小舟操る濁河にこりがわ



図9 7月吟行 濁河

雨催の曇天は、夏とはいえ、かなり寒そうである。水が濁っているのは、増水しているからであろうか。雨合羽を着て、岸を離れた流れの真ん中で、小さなボートを手漕ぎするのは、とても勇気のある行動に見える。

權一本命懸けるか夏大河



図10 7月吟行 權一本

岸に近いところに、人工的に作られた段差で、ごく小さな滝のようになっているところを、一人でボートを操って降りようとしている。次の瞬間が、どのようになったのか、知るすべがないが、この瞬間の写真をみているだけで怖さを感じる。

地に坐して背丈と同じ夏の草



図11 7月吟行 地に坐して

背面を夏の青草に囲まれるように、叢の上で談笑している。ボートの漕ぎ手は、無事に着岸、下船できたようである。

夏灯句を語り合ういつもの輪



図12 7月句会 夏灯

チェコの句会では、選句の後、自由に意見を交わすことが、最大の楽しみになっている。額団扇のカフェとは別のカフェで、テーブルを連ねて一つにして囲んでいる。親しい仲間たちとの、気兼ねのないやりとりの快さが伝わってくる。

4 9月の句会

チェコでは、2020年8月に、コロナ感染を抑制するための規制がやや緩和されていた。夏休みの月であるので、吟行をして、9月に屋外での句会が開かれた。このときの日本は、感染拡大していて、渡航できず、参加がかなわなかった句会である。

午後の陽の青葉をわたる焚火句会



図13 9月句会 青葉

南チェコの澄んだ空気が木々の間を通り、太陽がゆっくりと西の空に留まっている夏の暮れ方に、夏の日に代わる焚火の明るさと温もりのある句会の輪の中に自分も入っているように感じられて、この二つの句を作った。時間と空間を超えて共有した感覚である。

夏夕焚火の照らす輪まろの丸き



図14 9月句会 焚火

おわりに

俳句の鑑賞と創作を实践して、チェコと日本の俳句の同質性と異質性について、考察を試みたが、異質性よりも、同質性が、より強く意識された。

句会報に載せられたチェコの俳句を読み解くこと、写真に刺激されて俳句を詠むことは、日本にいながら、チェコと時空を共有する経験であった。吟行や句会の写真から俳句創作することで、同質性を具現できたのではないかと思う。

そして、2020年10月から、オンラインで句会に参加し、2021年1月の句会で、拙句「初雪の降る止む融ける眠る間に」が、高点の評価を得たことは、望外の喜びであった。「初雪」という季語が、生活感覚として、チェコと日本で共有しやすいものであること、中七の「降る止む融ける」が、リズムよく進んでいること、などが、読者の共感を得て、この句が句会で選ばれ

た理由であると思われる。

hacujuki no furu jamu tokeru nemuru ma ni

初雪の降る止む融ける眠る間に

PRVNÍ SNÍH
PADAL, PŘESTAL A ROZTÁL
BĚHEM SPÁNKU

HACUJUKI = první sníh
NO = označuje subjekt
FURU = padat
JAMU = přestat
TOKERU = roztát
NEMURU = spát
MA = mezi, během
NI = v

図15 句会報202101 句

HLASOVÁNÍ

22 A
19 BC
18 CA
9 ABC
2 BAAA = 11 bodů - autorka vítězného haiku - Paní Takako
11 CB
10 AC
20 B
8 C
6 AACA = 10 bodů - Jana Šídllová
14 C
23 BC
13 CBB
7 ABCB = 8 bodů - Hana a Jiří Steinerovi
12 BCB
15 ACC
3 BA
24 A
1 B

図16 句会報202101 評点・作者

日本には、写真や映像から句を作ることに對して、否定的な見方がある。江戸時代の俳諧から、明治時代の俳句へと近代化され、作者の実感が重視されるようになったことが影響していると考えられる。実感は、現場で実見して得るものなのである。バーチャルな世界が身近にある現在、俳句における実感の質が、問い直さ

れ、変容していくであろう。

本論文は、文部科学省科学技術人材育成費補助事業「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ（先端型）女性教員海外派遣制度」（2020年10月～2021年3月）による研究成果である。

参考文献

- 角川文化振興財団編 ふるさと大歳時記別巻（1995）『世界大歳時記』角川書店。
- 平井照敏編（1989、1996改訂版）『新歳時記（春）』河出書房新社。
- 平井照敏編（1989、1996改訂版）『新歳時記（夏）』河出書房新社。
- 平井照敏編（1989、1996改訂版）『新歳時記（秋）』河出書房新社。
- 平井照敏編（1989、1996改訂版）『新歳時記（冬）』河出書房新社。
- 平井照敏編（1990、1996改訂版）『新歳時記（新年）』河出書房新社。
- 角川書店編（1973、1977 7版）『図説 俳句大歳時記 春』角川書店。
- 角川書店編（1973、1977 7版）『図説 俳句大歳時記 夏』角川書店。
- 角川書店編（1973、1978 6版）『図説 俳句大歳時記 秋』角川書店。
- 角川書店編（1973、1977 6版）『図説 俳句大歳時記 冬』角川書店。
- 角川書店編（1973、1978 5版）『図説 俳句大歳時記 新年』角川書店。